

## 「花と鳥の樂園」展によせて 松村景文の花鳥画について —円山応挙、呉春との比較を通じて—

松村景文(1779~1843)について、同時代の絵師・白井華陽は『画乗要略』(天保二年[1831]序)にこのように記しています。

「花卉を以て著る。写生精妍にして淡采艶美なり。墨痕豊潤にして結構多姿なり。能く人望を称る。独り其の勝を擅にす。翎毛亦た好手、山水人物に至りては家兄を準のとす。名は一時に重し。」

この記述からは、景文が花卉(草花)や翎毛(鳥)を描くに優れ、名声を得ていたことが窺えます。景文は、現在ではあまり知名度は高くありませんが、江戸時代後期には花鳥画の大家として知られていました。本稿では、景文の略歴を紹介するとともに、その花鳥画の魅力を、応挙や呉春の作品と比較しながら見ていきたいと思います。

景文は安永八年(1779)九月五日、京都の富裕な町家に生まれます。松村家は代々金座役人を務めており、父の松村嘉左衛門匡程もまた金座役人でした。景文は後妻の子でしたが、匡程と先妻の間に生まれた長男が呉春です。呉春・景文兄弟の年齢差は二十七才で、父を二歳の時に亡くした景文にとって呉春は父親代わりのような存在でした。呉春は景文にとって絵画の師でもあります。前記の『画乗要略』に登場する「家兄」は呉春を指します。

呉春(1752~1811)は松村家の家業の金座役人を務めつつ、漢画系の大西酔月にまず絵を学んだといひます。二十代初めには、俳人であり南画家としても著名な与謝蕪村に師事し、南画や俳画、俳諧を学びます。父や愛妻の死を契機に天明元年(1781)に京都から池田

に移り、翌年、姓名を呉春に改名しました。蕪村没後には、写生を基盤とした平明な画風を打ち立て京都画壇で大きな影響力を持った円山応挙(1733~95)に就きます。寛政元年(1789)より京都四条に住んだ呉春のもとには多くの弟子たちが集まり、四条派を形成します。

応挙や呉春と同時代に活躍した上田秋成は、応挙について「衣食住の三つにとんと風流のない、かしこい人じやあつた」、呉春について「くい物はさまざまと物好が上手じやあつた」と述べており、勤勉タイプの応挙に比べ、呉春は食い道楽の風流人であったことが窺えます。こうした性格の違いは花鳥画の特色にもあらわれているように感じられます。

応挙の花鳥画として「黄蜀葵鷺鳥小禽図」(図1)を取りあげてみると、写生を標榜した応挙らしく、ひねった首、踏ん張る足の角度などが精緻に捉えられ、胴体は丸々とした立体感に満ちています。細部まで丹念に描き込まれた羽毛や鱗状の足の皮膚を表す線は、質感を示すように、ややゴワゴワとしたものとなっています。明るい白色で表す鷺鳥に対し、奥の黄蜀葵は暗く淡めの色調を用いています。没骨で表された暗緑色の葉には繊細な濃淡の差が施されており、葉同士の前後関係が巧みに示されています。本展に初出陳される応挙筆「雪汀双鴨図」(図2、大和文華館蔵)は淡彩を基調として、やや簡略な描き方がされていますが、胴体のラクビーボールのような立体感、ゴワゴワとした毛描き、鱗状の皮膚の緻密な描き込みなどに、応挙の描く鳥の特色が表れています。

「水汀鴨図」(図3、野村美術館蔵)は四条時代の呉春作品です。写生を反映したその画風は、応挙の画法をよく学んでいることが窺えます。一方で、画面右の鴨を見ると、立体感はあるものの胴体のボリュームを強調せず、頭部から首、胴部、羽先にかけて、流麗な曲線を描くように表されます。細やかな毛描きも質感を示すのではなく、軽やかな筆致で爽やかに表現されています。呉春は応挙の画法を学ぶ前に、蕪村のもとで南画を学んでおり、池田時代「孔雀図」(図4、洛東遺芳館蔵、本展出陳)のように、瑞々しい筆勢を残す花鳥画を描いています。風で笹の葉が揺れ、孔雀は左方をじっと見つめており、しっとりとした情感が漂います。応挙の写生法を学んでからの四条時代にも、若い頃より培った南画の清雅な情趣や俳諧の軽妙な洒脱さが織り交ざっている点が呉春の花鳥画の魅力を生んでいるといえます。

兄である呉春に絵を学び、共に妙法院門跡に出仕するなどして活躍し、兄の没後には、同門の岡本豊彦とともに四条派の発展を牽引したのが景文です。景文の「花鳥図」(図5、大和文華館蔵、本展出陳)を見ますと、羽毛や花びら、葉の一枚一枚は、整理されたやや省略的な表現となり、呉春より更に軽やかな色彩、筆使いで表されています。省略化された表現の中にも鳥の姿や花や葉の角度は写生を基に的確に捉えら

れており、花びらを象るスルスルとした描線の艶やかさ、筆勢を残してずっと伸びる葉先の軽やかさが、花や鳥たちの活き活きとした風情を伝えていきます。葉の描き方に注目すると、ごく淡い緑の色面でおおよその形をとった後に、潤いのある深緑色を重ねていることが分かります。場所によっては深緑色を敢えてラフに施し、下の淡緑色を残す箇所もあります(図6)。こうした描法は応挙の花鳥画にすでに見られますが(図7)、景文はより意図的に筆跡を残しており、それによって軽快な雅趣が増しています。

景文の花鳥画は、応挙の写生技術をしっかりと吸収しつつ、呉春譲りの軽快な筆致をさらに洗練させた点に特色があり、その流麗な花鳥画は広く愛されました。景文没後の弘化二年(1845)に、高弟たちの間で景文の偽物を作らないという誓約書が作成されており、それほど景文作品の需要が高かったことが窺えます。四条派からは竹内栖鳳といった明治の大家も生まれています。写生に瑞々しい情趣と洗練された軽妙さを加えた景文ら四条派の花鳥画は近代の花鳥画の動向にも影響を与えました。

(宮崎もも)

※図1は『円山応挙展』(愛知県美術館、2013年)、図2は『聚美1』(青月社、2011年)、図7は『花鳥画の世界6』(学習研究社、1981年)より複写しました。

- 図1 円山応挙筆「黄蜀葵鷺鳥小禽図」部分
- 図2 円山応挙筆「雪汀双鴨図」大和文華館蔵 部分
- 図3 呉春筆「水汀鴨図」野村美術館蔵 部分
- 図4 呉春筆「孔雀図」洛東遺芳館蔵
- 図5 松村景文筆「花鳥図」大和文華館蔵 双幅のうち左幅
- 図6 図5の部分
- 図7 円山応挙筆「芙蓉飛雁図」部分



図1



図2

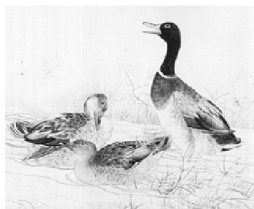


図3



図4



図5

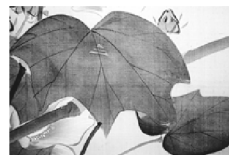


図6



図7

季刊 美のたより No.192

平成27年 10月 10日

発行 大和文華館